

4月にオックスフォードに入り、セント・アンソニーズ・カレッジにある中東センターMiddle East Centreの客員として、種々の研究活動を行った。5月17日～18日に中東センターで開催されたGlobalisation Workshopに参加し、多数の参加者と意見交換を行い、自身も”Networking: Legacy of the Pre-modern World Systems and the Post-modern Orientals”というタイトルで研究発表を行った。また、6月5日にはWomen’s Rights Research Seminarの一環として”Women’s Football and Futsal in Iran: their challenges and struggles”というタイトルで講演を行い、出席者と意見交換をした。その他にも、オックスフォード大学のTrinity Termに行われたさまざまな勉強会、ワークショップ、講演会に出席して知見を広め、多くの研究者との交流をもった。また、オックスフォードに点在するさまざまな図書館・資料室を訪れて、中東の歴史やグローバル化についての資料や研究書に目を通してノートをとったり、コピーのとれるものはコピーを入手したりした。

オックスフォード大学の諸カレッジは、8月中はサマースクールのために使われ、研究者の多くも大学でほとんど会うことがないため、カレッジには所属せず、オックスフォード大学Bodleian図書館利用者としての資料講読、そして、ヨーロッパ域内で開催された2つの国際会議への出席、その合間にはより気候の良いニースで研究発表の準備や論文執筆に専念し、8月末から9月初頭はロンドンに戻って、ロンドン大学SOAS（東洋アフリカ研究学院）の図書館を利用しながら研究をすすめた。なお、ポーランドで開催された国際会議とロンドン滞在は、科学研究費による研究プロジェクト「イスラーム・ジェンダー学」の研究活動として行い、交通費・滞在費は科研費の分担金で支払った。

北欧諸国は中東からの移民を近年多く受け入れており、それに関する、あるいはそれに伴う中東研究の新しい動向をみるのが目的で、8月16日～17日に、フィンランドで開催された北欧中東学会Nordic Conference of Mid

dle East Studiesに参加した。8月16日には”Home in a pocket” for “Home-on-shoulders”というタイトルの研究発表を行い、他のパネルにも参加して北欧在住の研究者との意見交換や交流をもった。

8月23日～27日は、クラクフ（ポーランド）のヤゲヴォー大学で開催された国際会議 Commission on the Anthropology of the Middle East (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)に参加し、”Neck, Maternity, and Sex-change Operation: Controversy on the gender norms of Iranian football players”というタイトルで研究発表を行ったほか、すべてのパネルに出席し参加者との意見交流を行い、交流を深めた。

9月5日にイギリスからイランに移動した。テヘラン大学のプールロスタミー准教授の世話で、テヘラン大学（大学院）世界研究科に所属し、自分の研究を進めるかたわら、日本研究グループのスタッフや大学院生たちとの共同作業を行ったり親睦を深めたりした。特に、日本・イラン外交90周年の記念シンポジウム開催のために、開催準備のワーキング・グループの一員として、プログラム策定や在テヘランの日本企業支社や大使館との折衝などにも加わった。経済制裁下にあるために多くの困難があったが12月16日～17日の特別展示とシンポジウムにこぎつけることができた。また、11月10日～11日に世界研究科で開催された1st Biennial Conference of Iranian Studiesに参加し、”Women’s Empowerment and Sports from a viewpoint of a Japanese Researcher”というタイトルで研究発表を行った。

在外研究機関を通じて、イラン／ペルシア系の人々のグローバルな商業活動や移動の歴史、近年のグローバル化と文化の諸問題（移民、ICT普及によるコミュニケーションの変化、女性スポーツの普及など）について、いろいろな角度から調査し考察することができたが、論文としての発表にはいたっていない。中途となっている論文の仕上げを今後の課題としたいと考えている。イランで滞在するにあたって、経済制裁の影響は覚悟していたが、実地で抗議活動後の1週間におよぶインターネット切断、2020年初頭のアメリカとの関係の一時的な緊迫を経験し、そして2月からのコロナ感染症の拡大によって、調査研究予定の大幅な変更のみならず、予定よりも早い帰国を余儀なくされた。心残りも少なくない。それでも、オックスフォード大学での滞を含むヨーロッパでの経験、30年ぶりのイラン長期滞在は、研究者としてきわめて有意義なものであったと考えている。